

地震研究所・技術部の紹介

嶋 本 利 彦（技術部運営委員会）

地震研究所は、その創立当初から観測用機器の開発を重視し、工作室の充実に努めてきた。その結果、水平振子傾斜計、加速度地震計、平板バネ式上下動地震計、坑井型傾斜計などが設計・製作され、それらを駆使した観測はとくに研究所初期の研究の推進に大きな役割をはたした。これらの多くは、金工室・木工室を中心とした技術部（工務部とも呼ばれてきた）で試作製作されたものである。技術部では、金工関係で 旋盤 4 台、フライス盤 4 台、万能帯鋸盤 1 台、鋸盤 1 台、彫刻機 1 台、電気炉 1 台、高速自動巻線機 1 台、木工関係で 手押しかん盤 1 台、昇降鋸盤 1 台、軸傾斜横切盤 1 台、電気糸鋸盤 1 台が現在でも稼働している。

定員削減の波に大きくさらされたのが技術部である。かつて 10 名近くいたスタッフは、数年前に実質上浅田鉄太郎氏が 1 人という状況になった。同時に、科学技術が高度化するとともに多様化し、高度で多彩な機器を大学の技術部だけですべて製作することは困難になりつつある。しかしその一方で、大学附置全国共同利用研究所として地震と火山に関する独創的な基礎研究を推進するためには、新しい実験・観測機器の開発に対する要求はこれまで以上に強いものがある。少ない定員でどうやって多様な機器を開発する体制を作るかが、技術部として緊急に検討するべき課題である。

浅田鉄太郎氏が平成 8 年 3 月に停年を迎えられた後、後任として高エネルギー物理学研究所から大竹雄次氏を迎えることができた。同氏は電気の専門家として加速器を使った様々な実験と機器開発をしてきた方である。平成 8 年 9 月後半から研究支援推進員の制度が始まって、浅田鉄太郎氏が技術部に復帰された。これで、機械と電気の両輪がそろったことになる。また本年度から、坂上 実氏と是澤定之氏が併任として技術部の活動をサポートしていただくことになった。昨年度末から始まった工作機械使用講習会では、ご両名の貢献が大変大きかった。さらにそれ以外の数名を加えて新・技術部を作り、これからの機器開発体制を充実させようという動きもある。10 年以上縮小を続けた技術部に、小さな逆の動きが見え始めたのではないか。

以下に添付した 2 つの表は、浅田鉄太郎氏が平成 4～7 年度までの 4 年間に製作された物品と作業のリストである。依頼のあった研究室と依頼者、および作業に要した時間が 2 番目の表にまとめてある。実験機器の補助的な小さい物品が多いが、仕事数だけから判断しても、技術部に対する要望の大きさが伺える。今後技術部では、少ない人員でいかに日常的に必要とされる工作をこなすか、どのような戦略と体制で新しい実験・観測機器を開発していくか、また院生たちにどうやって開発の意欲を育てるか、などの問題を検討していきたいと思っている。